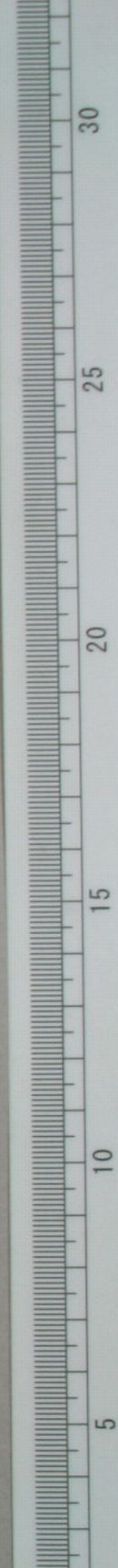


清
月
本
録

明
治
卅
七
年
八
月

三

特別
14
1919
198



波子屋...

○ 船の乗組員と一々活版の御其の女婿
 池田有親は先年一砂金採集の爲、米田の北
 方コロンタイキに赴くと、アラスカの山
 を踏んで、船中の冒険をして、後々目的を
 達せしむることを成し、歸る其の冒
 険の奇事興味を感じ、其の船中
 一々在アラスカ山銀行の出板を
 此と云ふ一巻を贈るんを、印の
 を通して、おねがひえん、冒険

の大ききと世に魚の味の深きを感し、三伏の
日蒸熱と云ふを、昔丹菜を生かせしめた為
し余り後ちの冒険にりの権さしめ
ひある、池田有記(六帖)と余の心さす
るゆゑ道かたのゆゑ、米田(一)の
くを米田、我漁を救ふし世事を
世をみるさしめ、左に紀りのさすを
しと一日の昔をとりん(一)の
十七年八月十五日)

東林書院

全候をたふさすし、一に其流と物あり
國狂呼稱して昔を執と増の往々を
舞え歌を擲ち之を流くし、余の
米田(一)の體健(一)再入を(一)
物せん乃ち回ると、山河を渡はる
月北なる、世を流く、國(一)の
人と流る(一)の

治承元年(一)の
二蛇の世し、
西曆一千八百九十一年二月十日

同行ある大坂人と桑名の岸に棧橋と
リ汽船アリヤン船ヲ搭しアラスカを往復
の道より上り余等も此行をえ来休めを
けり此北の棧橋に見えぬと拍案次
りつゝもりき船中余等かの行を極し
程々の事ありしゆも亦たアラス
カを往復の船に搭ししゆ一今より船中の
舟は流布るゑあり軒窓のすぢを
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心

未だ船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心
ししと船中みんん余等も此舟の心を
既に此舟八月廿四日舟は耕心

徳川國々々々々々々々
二帳をとりし山の上へ運搬

セツを心得て、其の三十餘年のあつた
月を費ししをいふに、其のあつたの
御舟の困難をいふに、其のあつた
同行者の大抵、其のあつた
を助けしこと、其のあつた、此人のあつた
境をいふ

あつた、其のあつた、其のあつた、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

十カ、シヤート、市街の景況を記し、
市街のアラスカ、其のあつた、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

東京府
東本願寺

行のあつたを記し、其のあつた、
其のあつた、其のあつた、其のあつた、
亦市街の熱帯を記し、其のあつた、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

上陸地を記し、其のあつた、
其のあつた、其のあつた、其のあつた、
行のあつたを記し、其のあつた、
記し、其のあつた、

廿六日、其のあつた、其のあつた、

日炎呼と回くハシテスニ着てしと考くしと
起き申板も出ししは湾くしと考きし湖面の
如し雲岳四面を楯と峻嶺一帯ありしと考
船を陸と離く一英里のありしは四
坡の短艇を却しと考物と運搬せし山坂
遠海くし潮ありは泥信運くは物も
く泥を混するを数艘の貨物と考くは
虎く考くは船長と考くは船者くし
舟楫ありしと考くは船を五英里ありしは
海雨を考くありしは上陸ありし
考く是の貨物と考くは北詰ありし考き



入里しと考くは北詰ありしと考くは

北洋の物況ありしと考くは、冒険ありし北の心
テスニ控し北の山を控し下り北の
準備を測入。而して北の山を控し
物を運搬しあるを考くは、
物を運搬し終るは、テントを
七輪し更し前を圓くする、
ニバルテスニ控し、日月の状況
ニめ山探險の物況を考く
三月の北の山、北の山を天幕内の北の山
テスニ控し北の山を控し、北の山を

余等の足さしむが余等とストロフを拾ふ
と名煙竟ともさるる唯紅ロケットのたけを
心も能りさるる渡を余等よりたも徳
るさる... 然皮二枚を交き上へ、なまも
種も交き、日浮山の綿を八寸、一枚の
重き物具と毛皮を具へしるるに

初めみ山、探探ふ出たる記さるる

三月三日晴晴 余等ハルテス山中、夫のみ山
を探探ふと鏡を背へし出たる此のみ山を
至修探探の征進、旅をさるる由の難関不
ぬ内さるる凸凹さるる雪終をりく二考、疾窮

東林堂

リ谷終る... 二十一日の天幕を張るる
余等の行ふ先を長金(向)の山に上りたる...
るおさるお上りたる積るる... 怒るる...
るおを無産之四十丈のみ上の山に上りたる...
船用の大綱トロツク... 機を引上るる...
れ也と... 四十丈...
るさる... 而して地盤をさるる... 結お...
るは雪をゆるる... 結お... 麦体
結お... 谷を... 戦林...
ぬ... 怪石... 険峻...
名状... 一山の... 谷

この船にありし三英を移す但と
とんと高一の船を御し先は頂より在
す余この頂より流汗皆を御し船より高
寺の難終るを御し先は頂より在
當と皆より御し高一の船を御し先は頂より在
を得るを御し先は頂より在
ありし

初め荒干の荷物を運搬す此状は二り
の池を渡り、望むるを御し先は頂より在
運搬す御し先は頂より在
えみるに英を御し先は頂より在



の状以つてあるを御し、右の池との池とある

この時早起し荷物を御し先は頂より在
先づ未の袋と種子一俵にして三つ五つおる及上
二一列のササ材を御し先は頂より在
と機重しとあるを御し先は頂より在
り高一の船を御し先は頂より在
舟を御し先は頂より在
幕の片隙を御し先は頂より在
幕の隙を御し先は頂より在
泊する帆船二艘を御し先は頂より在
とあるを御し先は頂より在

石油の空鑽を求め一、二個二十仙を購ひ
得る。えん金考とて如きもの用とてさし
しきを股其体洗濯の用とせし一と其体を洗
ふの器と一とたつて其使とせしと云

バルデスと天幕を搦てお山下にすむこの器
おとせしおしゆるまをいしと凡そ十三回を
費し其間木材を伐つこと二回を依り釣を
垂れし得るをせし遊術にて其器中一の代り
十の天幕をいしお山の池にすむ
十の天幕とていふ二の機を移し加
めおくことお山の池にすむとて後坂を張

東洋
林業

二、三日の間に而して三日目の早にこころを
の天幕を其一間を占めしおを搦ひ出さ
しゆりこころ天幕をせしゆりこころを天幕の
念ひ凡そ夜にの柱をいし用をせしゆりこ
以前とておつていふゆりこころをゆりこころ
ゆりこころをゆりこころ天幕をいしとて
り云

雪山に於ける天幕住居の状況を四月十日
の記の中へ述べしゆりこころを搦てんあつて
り云

おのりゆりこころを搦てんあつてり云

少くとも七しるゝ身体の軽きを乞ふに悦びん
一り物も一徳を乞ふし米も一徳を乞ふし終る
んころ二月まで一しこの二徳とローン無支
二十支おと徳も物半徳は乞ふとすのい
いとみるめとるんも乞ふを徳に乞ふ
し一取しき徳も乞ふ方とす

紀行さうく長き一々引用も行
祀を叙すこと容あうらん以下
紀行の末に靴ちる略記を抄るこ
とす

黒氷山の修験をむすべし二回天幕を移し二十



六の向を消し漸く峰頂を越えし其入るに
やとそ其い湖に向つて進み湖ありて八英
甲ううが今や雪に消え通路断絶し
らうとんばとを得るん船を造ること
と定めぬと船の後すう余等の乗
らうらるアラスカう大木ありて土人は大
概割船を作らせ使ふこととす
そん船北くも船の及ぶ丈を用意し
一は右舷の大木もろけんば板船を造ら
ふ一は左舷の舟と先り船の支側丈を割り舟の
めく作ら一側は板二枚つゝをかく度うも

き枝一打をあらん先端さぬ印のぬきとゆふ突
くくく 幸あまの國民もや瑞典の人を
し得るきけんば彼ボくく銀を傳り得て
此の枝を挽きくくく中々ぼんぬるを余
ハ遂に胸部の痛を起したりき初め船を
この困難の内くくく遊ぐりく出来しりく
そんくく此激流を下るとせし中々遊ぐ
氣を候と播種する節を催し暮候廿十日
も七を遊ぐりくく此くく湖をあらんとく
くぬる一週り以上を消し穀物播種する節
を失せんことを恐る困り遂に此の傳り國防

東表屋製

と云ふはの世を得るくくく今ま一日此物
を遊遊とんと山林を廻り終る湖の落る口
くくニアールン記のまじを又出しこく開
能上を初めくく開きてく播き播きをく振き
其間天幕も其傍の種くく人るき林中湖
畔のくく境の閑く農事くを試みるの時とは
くくく
くくく 茲に余其をくく一丈出印を来し
ハ氣候の夏候くく初め種子を播き
時を執りくく地くくく代暮す大
くくも勿論收穫をくくく悦び

一、六月廿七日、晴、暑、冷、雨、か、つ、り、雪、も、降、り、
る、ん、天、氣、日、々、と、り、り、為、る、圓、満、の、作、物、は、言、
而、も、い、か、ま、ん、も、未、だ、七、月、に、な、る、ま、だ、七、月、に、
九、月、の、中、旬、迄、と、あ、ら、わ、の、夏、期、も、い、は、其、内、に、
天、氣、好、後、し、井、心、熱、心、の、高、騰、す、る、こ、と、
べ、し、と、あ、ん、し、な、る、七、月、十、日、と、い、ふ、も、熱、
ぶ、而、も、い、か、打、角、を、言、ふ、も、穀、物、は、其、他、の、
寸、緑、も、い、か、産、る、言、ふ、の、と、い、ふ、も、於、是、初、を、
あ、ら、の、氣、候、と、い、ふ、も、い、は、な、る、と、い、ふ、も、
余、等、も、い、か、目、的、を、轉、す、の、に、い、は、さ、る、一、大、
る、と、い、ふ、も、い、か、

東、林、堂、の、書

初、の、余、等、と、い、ふ、も、い、か、今、の、ま、さ、る、一、年、丈、の、
食、料、を、用、言、し、な、る、此、一、年、の、食、料、は、何、れ、
の、状、況、を、視、察、し、若、し、不、の、ま、は、ド、ウ、ソ、ン、
行、く、べ、し、と、い、ふ、も、余、等、も、改、め、
言、ふ、と、い、ふ、も、い、か、即、約、を、し、或、は、人、の、
て、あ、る、パン、の、屑、を、拾、ひ、或、は、
徴、と、い、ふ、も、大、七、郎、と、
や、る、葉、あ、る、も、い、か、食、料、と、い、ふ、も、一、片、を、も、い、
ま、り、治、牙、拾、り、食、料、を、補、ひ、氷、山、の、内、に、米、
と、粉、と、塩、豆、の、粉、食、し、難、困、苦、し、未、だ、い、
鬼、角、饅、頭、を、余、等、も、い、か、今、の、
消、せ、し、の、十、二、月、の、食、料、は、い、か、九、月、

位さへ支ふ能はるるも、やんせ、何れ一程も
て七穀物出来れば之は、何れも、何れも、何れも、
と出来且つ綱を、何れも、何れも、何れも、
物も、何れも、何れも、何れも、
ある余、何れも、何れも、何れも、
を、何れも、何れも、何れも、
すも、何れも、何れも、何れも、
余等、何れも、何れも、何れも、
え、何れも、何れも、何れも、
余等、何れも、何れも、何れも、
日、何れも、何れも、何れも、



是、何れも、何れも、何れも、
し、何れも、何れも、何れも、
路、何れも、何れも、何れも、
この、何れも、何れも、何れも、
り、何れも、何れも、何れも、
頂、何れも、何れも、何れも、
る、何れも、何れも、何れも、
悔、何れも、何れも、何れも、
宿、何れも、何れも、何れも、
不、何れも、何れも、何れも、
路、何れも、何れも、何れも、

を主と心へん心 彼の白くも せりしもの 雪の雪を
ん成りしもの せりしもの 雪の雪を 何のよ
り及るしもの せりしもの 雪の雪を 何のよ
働きしものを 作らんを 固しもの 雪の雪を
又とせしものを 余等皆に 負たしもの 外はけ
ん成りしものを 余等皆に 負たしもの 外はけ
頂上二の絶頂 せりしもの 雪の雪を 何のよ
の名物日を 昔月し せんふも せりしもの 外はけ
く甘きや 先づの 第一の名物 せりしもの 外はけ
何とぞと 余等よの名物 其まゝなる せりしもの 外はけ

粉石お砂糠 廿二お能を 走らば 二三十井を
得べく 云れは 第一の 形便を ゆくま せりしもの
ふるんは こんを 走らば せりしもの 外はけ
ふとせしもの 因て 大湖の時 目下 天幕中の 取入る
をふき及る 余等よの名物 其まゝなる せりしもの
谷に 降りおる せりしもの 雪の雪を 何のよ
四五英を せりしもの 雪の雪を 何のよ
程清水を 降りおる せりしもの 雪の雪を 何のよ
ありし 雪の雪を 何のよ せりしもの 雪の雪を 何のよ
ふれとせりしもの 雪の雪を 何のよ せりしもの 雪の雪を 何のよ
二英を せりしもの 雪の雪を 何のよ せりしもの 雪の雪を 何のよ

ふふんとして大河を漕ぎお宿の路を蔽えり
りし漸くしてふりきんととを試みんとも
何れも下り難く人々皆物もんとて悩む
云何もせんかてさうし喰ひ物もとて悩む
動くと止むべきは女も人々は尚もを蔽
る人の名もを名角とて飲名ををまき以て
物路の者を得んとてさうさうは早うとて宿
の如末を片日遂に六月廿九日宿を打寄
天幕を二英にキャンブのふりぬすこと
らんり瀕りして是とて五十九日の教
いをもたのらんりさうさうとて余等とて

東洋
林
書

を越ちて毎日の夜つれづれ来る(カゲス)印
つて飲りて後う自由と名物を得るを白ゆす
らんりしらんりの名林も皆老婦の片隅にお
まきとて今も日本丸(自航の船也)に投し
て六英にキャンブの舟を飲名ををまきとて
ハ川者は一海せしらんり思をまき七英にキャン
ブの湖時こそあり者の能く海をまきらんり
らんりしらんり思をまきらんり思をまき
物を積むとて二回もまきの危路を冒し
る物を運搬し果てらんりの湖を渡る
際圓く難のふりて決るをて棹を以

つて六人の之を獲て大つて捉へり扱ひ進ん
る曲りし岸に舟を寄せ先が喫食し何ん
う物を占むべきやを指せし湖のや央し
よ島の岸に上りし各人の通話あるゆゑ互
を元出し各々天幕を張ること志す
…大抵ふらむ直るる所を先と出せんを一英也
南北の各々先手し以て客を以て金等の天幕
の事なきを有するゆゑワナノ合衆の者十
二人の末に一人の遊人ば彼を去るる余
等の天幕も亦あらずること…初めの客
—此大勢の二人の合衆を去るるゆゑ

東洋書院

是より大勢を去るるゆゑ追々去りて
十九人の客とあるゆゑ二人前の合衆は
此大勢を始むべきや…トランプ・キャンブの
事なるは皆に廿五半分の合衆の満足し
以りしゆゑは漸く満ちてゆく…初めの判
店なるは何れに彼れを捕らむる目と申す
此しこゝろ七半を得るるは先が余等も
満ちし合衆の事をしるべき
此湖の岸なる細流を辿りし湖の淵に
流るる岸集りたる余等も此の岸に
す或る棒を以て打ち或る鏡を以て捕ら

恰も池邊を漁して、一匹二十四尾を獲
たることあり又魁の外特若くはルコ
を獲しことあり湖解を余等々
し最も快樂多き日を交へしき嘗て
活り者とせる捕魚を誠なせる望火を因
て活活月杵を深き湖に沈めしことあり
喬林の中焚火坐えし湖林の藪き活活快
活なる舟ありき舟艇掉し湖に入る輪
舟角ありし活き鳥籠其籠景或人と
活魚の池を廻り此に止まり一冊を十冊
を得たり

引て八月十日より一人の記を著し余等々の活
の物を買んとし出で、余等如棧をのりしと
りし彼と活示し漸やく二十日とて印し
ふ事あり天幕も舟も毛衣二枚も鏡も物も未
も凡この物を合ふことあるん成強と推し
らんも今余が此處に客を招けばと二十
日とて印し湖に困強しと終るべき器具を
く棄印せしことあり二十日とて印し二十日
得志波の活を思つことあり二十日とて
活の成りし一活し……
十言八通余等々の物なり此くのりしき或

外の氷よりまきと見えぬ影の大方之を呼ぶに
一う向ひてゐれば一人の外國人も彼らから
てんことを流し彼ら路をぬきさる由も三人
の執事と打撃んとて立出たり時よしのめすも
まゝも彼ら路を山路のありも道ありつは
大層と柳をうし大抵の別目をぬく完の
えも知るゝ金等と五十おのまををる後
る従の團維と一夜余と危くも別目と
んと亂れくゝ止まんうの事こゝも
中へこゝもまゝの八方捕りてわう十時
とるなりと深くわづらひて数々のを

東林堂

ありては陰難拾ひうとまやし余のまきを火
しこゝ一木をぬき油鉢をぬきしと
彼ら外人ありありと道のなごしと云ひし
まきも別目のありありとまきをぬきし
こゝも海ありこゝも山あり別目とまきをぬきし
の名物を煮火とんば地をぬきしとまきをぬきし
こゝも山ありこゝも山あり別目とまきをぬきし
と数分の軽きとまきをぬきし別目とまきをぬきし
と防ぎ金を作りてまきとぬきし別目とまきをぬきし
供りて成りてまきとぬきし別目とまきをぬきし
氏も供りてまきとぬきし別目とまきをぬきし

しぬお上の横臥とあめを焼く余り外人と四方
ハ方々況をきく凡そ大切なる書物種々余ら
十七の四宮推定書せる詩をこら禁まざる
この朝余を磁石をさぐりしつりたる物僅
又一寸分を貸すのやうなは元し及を又出
たすはこのお山を流死するおらしと為
物を發せしと三心を決する

○手紙雑誌の事、也以出に雑誌の十
び一寸風をまらむが氣の利き自本の物
おへに雑誌を手紙雑誌ひある、とんを

本年の三月才一書を出版し此後お出さ
か出に、んを編輯者の器名人、桑田
正とあつたが、其人は其の編輯者ひある
うるんといふれおとまひいふ、社先も左の扱
ふことう書いてあつたを思ふと、大体を
誌の編輯者ひある、思ふに何人もおひある
世帯の雑誌に

本誌と或人の及午的出版をまねたを思ふ
し、おんおん、何の商刊ひある
雑誌とくせ、兎二角一個年即ち十二
個月刊と推言つて、及刊は、善る四の

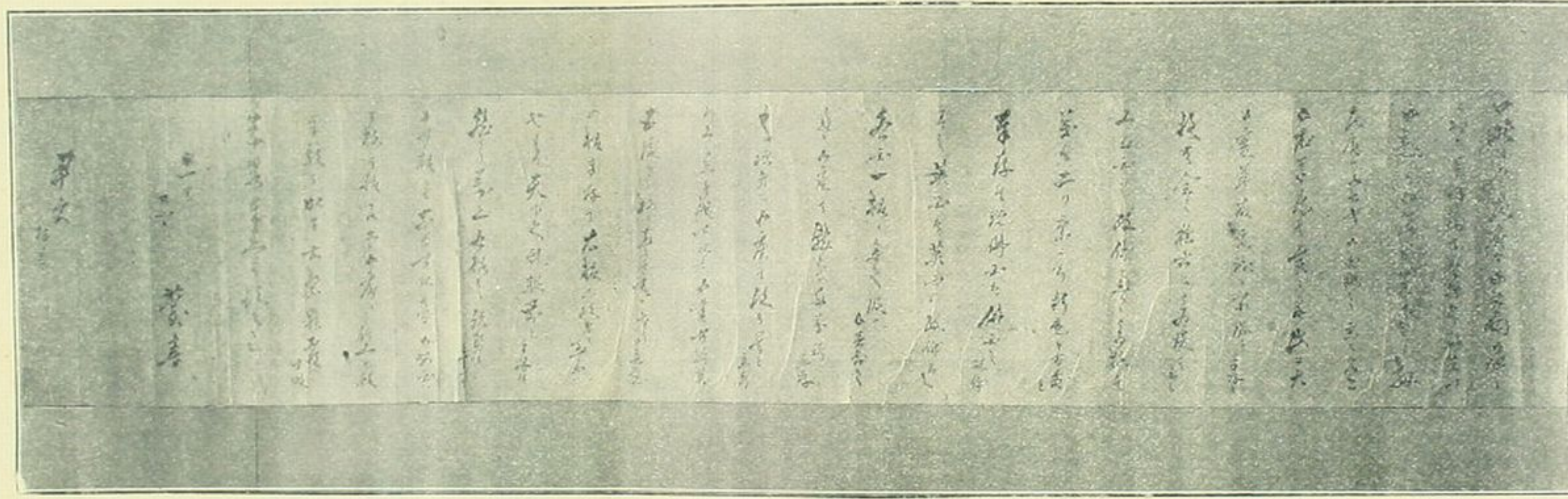
くるきりふち鞠の心手紙と申す美文
小説を編集、一年の月を快入して貯蓄
の美なるも可なり候

社説の総論を以てして、いかに
群衆の心を通じ、一年の月を快入して貯蓄

ゆるゆるめま家の及よ化すと云へく
体裁をきつうく、油をそく、材料
をもとをびく、選擧、いかに
史的な考へ、いかに、日間の
いかに、味の津々をいかに、強さ

東洋

(藏所氏略景尾長) 東手公喜慶橋一



○一橋慶喜公の手束

一昨日は左府之御書面御廻被成下、奉拜承候。寒冷之砌、先以御起居御清安、奉恐賀候。扱左府之御書中御心配之條々、乍恐御尤奉存候。實に無此上大御變革故、衆議も百端と奉存候得共、全く往古に被爲復候條も、又外國之政體通りに被爲遊候義も、二つながら行れ申間敷と奉存候。既に佛國は佛國之政體有之、英國は英國之政體有之、各國一様に無之段は御覺知之通に御座候。就ては私義聊愚存之次第も御座候得共、篤と愚考の上申上候様可仕候。御書中攝關五流云々杯に至り候ては、少々御過慮の様奉存候。右様の次第に至りては、やはり天下之亂眼前と奉存候。然し萬々一右様の形勢に立至候は、如何様にも盡力可仕候間、御安心被遊候様、乍恐御序にて仰上候様奉願候。昨今甚繁雜、不得寸暇、蒙略奉申上候、頓首々々。

十一月二十二日

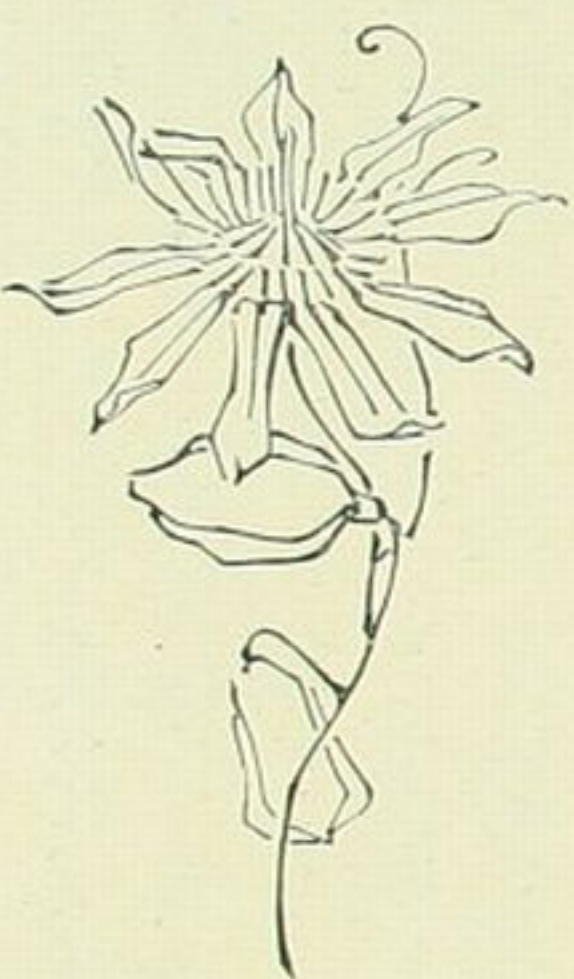
慶喜

尹 宮 拜 呈

尙々御繁多の砌、御返書之義は御斷奉申上候、已上。

本書は、一橋慶喜公が慶應三年大政奉還の翌月、尹宮より近衛公の密書〔本號所載、大政奉還反對意見〕を回附せられたるに對して贈れりしものなり。されば近衛公の書翰を閲して後本書を讀まば、事體自ら明瞭なるべし。流石は橋公の眼中天下の形勢を透視したればこそ、物論沸騰の渦中に在りて、尙ほよく妥當なる所見をも抱けりしなれ。本文中左府といへるは、左大臣近衛忠房公をいふ。尹宮とは別に賀院宮とも云ひ、今の久遠宮殿下の御父君に當る方なり。當時の尊王家にして、月照等と事を共にし、捕はれて幽閉せられし事あり。王政復古の後、幽閉を解かれ三品を經、二品に叙せられ、神宮祭主となり、大いに力を我邦美術の保護に盡されき。明治二十四年歿す、年六十七。

手紙雜誌 第五卷 第一號



○大政奉還反對意見

〔編者いふ、本書は維新當時に於ては勿論、今日に至るまで、その當事者の外は全く何人も見ず、又何人も知らざる、隨つてかの浩瀚なる「維新史料」にも洩れたりし密書中の密書にして、必しも維新史を編まん者の参考のみといはず、斯る意見を懐けりし人の名さへも、今の大方人にとりては、珍らしくも又興味多かるべき事どもなり。巻頭に掲げたる寫眞版一橋慶喜公の書簡中左府の書云々とあるは、此の書を指せるものと知るべし。〕

左大臣 近衛 忠房

尙々早々火中火中願上候、實に實に實に可恐可恐可恐候。早々火中火中願上候。

手紙雜誌 第五卷 第一號

は、如何様にも盡力可任候間、御安心御遊候、御願御申上候、
にて仰上候様奉願候。昨今甚繁雜、不得寸暇、蒙略奉申上候、
頓首々々。

十一月二十二日

尹 宮

拜 呈

慶 喜

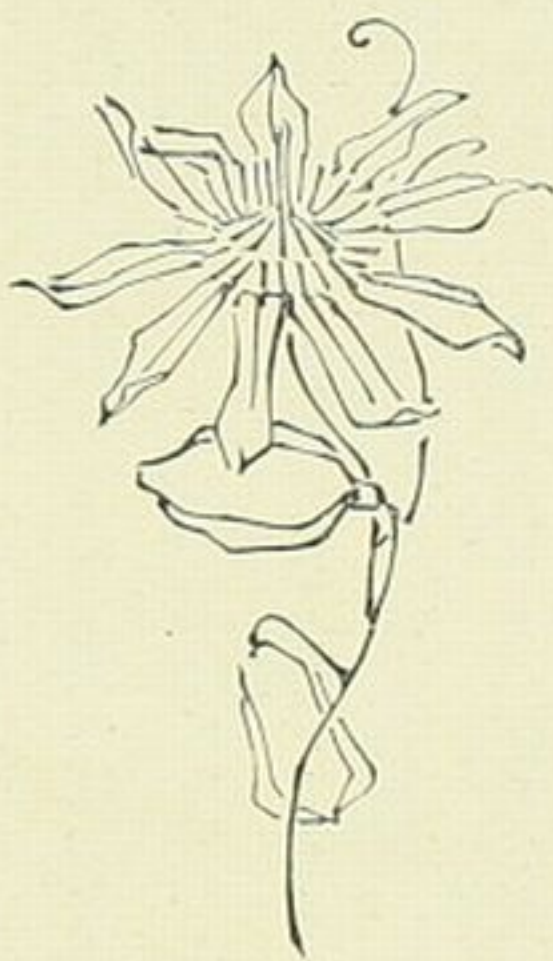
尙々御繁多の砌、御返書之義は御斷奉申上候、已上。

本書は、一橋慶喜公が慶應三年大政奉還の翌月、尹宮より近衛公の密書
〔本號所載、大政奉還反對意見〕を回附せられたるに對して贈りしもの
なり。されば近衛公の書翰を閲して後本書を讀まば、事體自ら明瞭な
るべし。流石は橋公の眼中天下の形勢を遠視したればこそ、物論沸騰の
渦中に在りて、尙ほよく妥當なる所見をも抱けりしなれ。

本文中左府といへるは、左大臣近衛忠房公をいふ。

尹宮とは別に賀院宮とも云ひ、今の久邇宮殿下の御父君に當る方なり。
當時の尊王家にして、月照等と事を共にし、捕はれて幽閉せられし事あ
り。王政復古の後、幽閉を解かれ三品を經、二品に叙せられ、神宮祭主
となり、大いに力を我邦美術の保護に盡されき。明治二十四年歿す、年
六十七。

手紙雜誌 第五卷



○大政奉還反對意見

〔編者いふ、本書は維新當時に於ては勿論、今日に至るまで、その當事者の外は全く何人も見ず、
又何人も知らざる、随つてかの浩瀚なる「維新史料」にも洩れたりし密書中の密書にして、必しも
維新史を編まん者の參考のみといはず、斯る意見を懐けりし人の名さへも、今の大方人にとりて
は、珍らしくも又興味多かるべき事どもなり。巻頭に掲げたる寫眞版一橋慶喜公の書簡中左府の
書云々とあるは、此の書を指せるものと知るべし。〕

左大臣 近衛 忠房

尙々早々火中火中願上候、實に實に實に可恐可恐可恐候。早々火中火中願
度存申候。

昨鳥者芳書忝存候、寒冷追日相加候處、彌以御安全候條恐賀候。抑御細
細御書中何も〱拜承候。尙又御序も被爲在候は、苦心之次第吳々大樹へ
宜敷御申傳希入置候。誠に時節とは乍申、幕威は勿論朝威も不相立、恐入
候而已に候。下官杯の見込にては、何國迄も御委任可然と存候事に候。乍去大
樹より政權返上とあれば、大樹は是迄よりも御親敷朝廷へ被召、朝廷の人に被
遊御採用が御宜敷、太政官初舊儀御再興に相成候而、攝政初大臣、大樹も大臣
に候へば、共々に評論有之度事、且又諸藩は夫々八省を初諸寮諸司に被召加、
萬代不朽之御政法不相立ば不相成、唯銘々心々之事而已申立候而は、中々太平
に治り候時勢は決而無之、實に實に不易と存苦心の事に候。大樹へ御委任な
れば元々の咄にて却而宜敷候へ共、復古なれば復古にて永世不朽太平の政法を
取行ひ候はねば不相成と存候より、ムサと過日下官初申合及建言候事なれ
共、中々迎も難被行哉と被察候。薩も近々上京の様子、最早大久保市藏先日
より上京致居候由に相聞え候。當時は當方へは一切誰一人も不來、大不首尾
と相見え候事に候。定而帥宮、山階宮、正三邊へは毎々出入致居候事歎と被察

日紙分刊くもす 忍文

候。中山、中御門、大原、正親町少將、鷲尾侍從、五條、平松、滋野井、鳥丸澤其外あれこれの堂上向隠謀在之候様子に相聞え候。全薩と同論の様子に候。實に實に國賊共と申は此事にて候。中々油斷成不申、可恐可恐事に候。方今の形勢にては、只々義理も條理も相不立、強き者勝ちの世の中、何共々々絶言語切齒之事に候。畢竟薩は勿論、中山初の堂上向は幕威をたふし、朝政復古と表に唱へ、全く薩意に従ひ候心底と被察候。實に實に姦賊と申者に候。且又元三條實美にも何れ歸京と存られ候。歸京の上は大臣職に御採用在之度杯薩より迫り候に無相違と被察候。元來實美の心底には攝關五流をたふし度存念海岳在之候様子顯然之義、中山初も尤同意之事に候。何れ不遠、元三條實美事執柄大臣に可昇進哉と被察候。中山にも御外叔かた、大政大臣左大臣之内に可昇進哉と被察候。何れ薩州之存意は此邊と被察候。尙又天下の政務は薩專掌握可致歟と被察候。中々不容易一大事、甚だ可恐可恐可恐可恐事、何共何共絶言語候。此末何れ右邊に可相成歟と心痛口惜次第に候。何分鎌倉以來、武家へ御委任にて七百餘年於朝廷廢絶之政權、進も何一ツ被行候謂れも無之、臣下は微力薄祿之義、往古は臣下も皆々大祿を取り、官位田宅にて中々大祿を取り候て、兵權も在之義、中古以來は皆々家祿と相成、夫も追々の亂政の末か薄祿に相成候次第、中々天下の政務を取扱ひ候事などは存も不寄義、併し復古なれば致方も無之候間、精々及丈は勤仕も可致、乍去復古と申せば、大凡舊典夫々御再興無之而は、政事之局所も無之義、太政官を初、省察司、各百官御再興無之而は進も難出來、諸國は封建の儘にても、夫々規則は相立候はねば進も難被行義、中々急速に夫是難被行義、乍去復古なれば復古にて、太政官には執柄を初、大臣、員外大臣を初、夫々評論在之候筈の義、其外省察司も追々御再興在之義、右委曲は過日及建白候事、右邊に相成候は、眞實朝威も相立、又幕府も大臣職勤仕にて候へば、矢張幕威も相立候義、何卒復古なれば右邊に致度もの、然るに薩の見込にては、太政官初の御再興は不好、只新に政事之次第を相立、參政、寄人杯をこしらへ候了簡之様子、政事は英吉利流、薩の自儘之政事に致度様子、右に中山初したがひ居候様子、中々絶言語候。何れ不遠、攝關五流は退けられ候義と覺悟に候。實に實に實に口惜次第何共絶言語候。

扱昨日は何寄の美肴一折惠給、深く辱存候。早速御禮可申入等之處、參

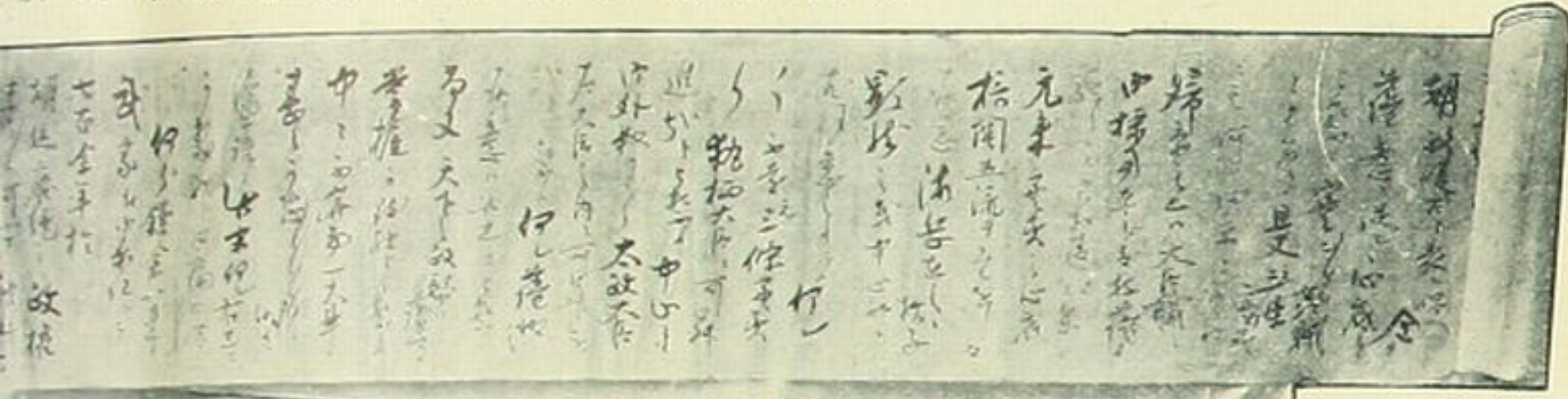
内、夫より別荘へ行而、彼是延引、今日に相成候條御斷申入候。此品不珍候得共、御器返上迄に入置候也、恐々謹言。

十一月十九日

三百
大亂書不文御分り兼と存候、御判覽希入候、早々火中々々祈り入存候事。
極内密々秘々中之秘
尹宮玉几下
早々御火中々々々

忠房

近衛忠房公本簡書(長尾景略氏所)



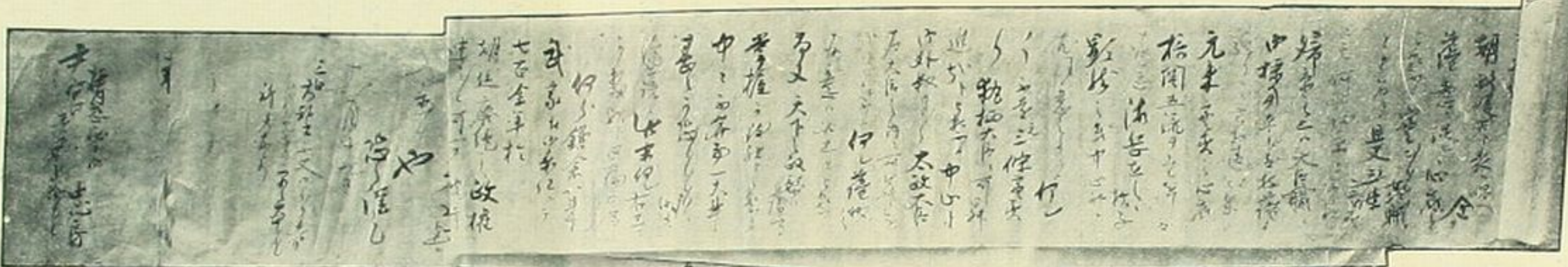
近衛忠房公は本年物故せられし篤庵公の父君なり。當時左大臣の職にありて、専ら要路に當りきと雖も、所謂廟堂革新派を目して國賊義賊呼はりせしより察すれば、寧ろ保守的思想の人にせんとするを見て此の上もなき危險との相憂を抱けりし也。さらば公は佐幕黨か、必しも佐幕黨にあらず、而も其の實に於いては、大政の奉還に對して、少くとも自家一身にとりて不利益

Handwritten notes at the bottom of the page, including the characters '忠房'.

何共絶言語候。此末何れ右邊に可相成歟と心痛口惜次第に候。何分鎌倉以來、
 武家へ御委任にて七百餘年於朝廷廢絶之政權、連も何一ツ被行候謂れも無
 之、臣下は微力薄祿之義、往古は臣下も皆々大祿を取り、官田位田にて中々大
 祿を取り候て、兵權も在之義、中古以來は皆々家祿と相成、夫も追々の亂政の
 末か薄祿に相成候次第、中々天下の政務を取扱ひ候事などは存も不寄義、併し
 復古なれば致方も無之候間、精々及丈は勤仕も可致、乍去復古と申せば、大凡
 舊典夫々御再興無之而は、政事之局所も無之義、太政官を初、省察司、各百官
 御再興無之而は逆も難出來、諸國は封建の儘にても、夫々規則は相立候は
 ねば逆も難被行義、中々急速に夫是難被行義、乍去復古なれば復古にて、
 太政官には執柄を初、大臣、員外大臣を初、夫々評論在之候筈の義、其外省察
 司も追々御再興在之義、右委曲は過日及建、白候事、右邊に相成候は、眞實
 朝威も相立、又幕府も大臣職勤仕にて候へば、矢張幕威も相立候義、何卒復古
 なれば右邊に致度もの、然るに薩の見込にては、太政官初御再興は不好、
 只新に政事之次第を相立、參政、寄人杯をこしらへ候了簡之様子、政事は英吉
 利流、薩の自儘之政事に致度様子、右に中山初したがひ居候様子、中々絶言語
 候。何れ不遠、攝關五流は退けられ候義と覺悟に候。實に實に實に口惜次
 第何共絶言語候。
 扱昨日は何寄の美肴一折惠給、深く辱存候。早速御禮可申入筈之處、參

御禮可申入筈之處、參

(藏所氏略景尾長)簡書本公房忠衛近



内、夫より別莊へ行而、彼是延引、今日に相成候條
 御斷申入候。此品不珍候得共、御器返上迄に入
 置候也、恐々謹言。
 十一月十九日

三百
 大亂書不文御分り兼存候、御判覽希入候、早々
 火中々々祈り入存候事。
 極内密々秘々中之秘
 尹宮玉几下
 早々御火中々々々々
 忠房

近衛忠房公は本年物故せられし萬曆公の父君なり。當時左大臣
 の職にありて、専ら要路に當りきと雖も、所謂廟堂革新派を目
 して國賊義賊呼はりせしより察すれば、寧ろ保守的思想の人に
 して、かの少壯氣銳の徒が、王政復古の名の下に、政權に參與
 せんとするを見て此の上もなき危險との杞憂を抱けりし也。さ
 らば公は佐幕黨か、必しも佐幕黨にあらず、而も其の實に於い
 ては、大政の本道に對して、少くとも自家一身にとりて不利益
 なりと思惟したりしものも如し。殊に慶喜公(所謂大樹公)の爲
 めにお切介的同情を表したりし所以は、或はその苦慮する所寧
 ろ他にあらざるなきかを疑はしむるものあるに於いてをや。見
 も角も本書の如きは、所謂密書中の密書たりしに相違なきや言
 題ふまでもなし。(巻頭慶喜公書翰參照)



○長くてありぬべき文みじかくてよかるべき文 一葉女史

文は短くして事のわき易きを第一と人のいふ、男のなれど本多の何がしが陣中よりの文いつもく引出されては世のほめ物にたへらるれど、そは折からによりたる物なり。短かくてありぬべき時あり、長きを人の樂むことあり、遠くはなれて逢ひみるに難く唯大空を打ながめては、故郷の人々今いかさまに暮すらん、野山のさまもなつかしく、彼の家、この家いかならん、里の童、鎮守の森とさましく思ひつゞける折したしかるべき人より文のきたる、いかばかり喜ばしからざらん。封じをどくも戻かしう見るに、暑さ、寒さいかに暮したまふ、此ほど此處にもかはりなし、御禮承らばやとのみあらんは口惜しさ思ふべし。かゝる時の文の上にては雑事とて捨つべきものなく、一もとの草、一頭の犬、媪も翁もことごとく見る人の慰めになりて暫し旅寐の憂さをわするべく、げによき友よと其人いとし懐かしうも成りぬべし、長さ尋に餘るともこぼわづらはしからぬこと、短かくてもよかるべきは近火負傷の見舞、すべて不慮のことに人の心あはたしからん折、いと長々と書きつゞけたる見るもうるさく、なかくの心地ですべき。「唯いさゝか抄録」

○芹うりの十銭生涯

何處持參の芳翰落手、御無事の旨珍重存候。類火難に御のがれ候よし、是又仕合難申盡候。残生いまだ漂泊やます、湖水のほとりに夏をいとひ候。猶こち風に身をまかすべくやと秋立頃を待かけ候。且兩御句珍重、中にもせり賣の十銭生涯かるき程我世間に似たれば、感慨少からず候。口實他に越る、いよいよ風情可被懸御心。愚句、

京にても京なづかしやほととぎす

暑氣に痛候て及早筆候。

小春 春 丈

小春は加州金澤の俳人。因に記す、せり賣の句、「十銭を得て芹うりの歸りけり」

ば せ を

○古色可愛の品(高價ゆゑ買入見合)

文選六臣註いかにも古色可愛之品に御座候、併高價迎も相談もこのひ申間敷、致返却候。全體御場所には六臣は無之哉と存候、左候得ば○本にて有度ものに御座候得とも、此價にてはいか様減じ候ても、餘程の儀と可相成候間、先々書林へ被返戻可然存候。別紙も同様致○回候、草々頓首。

十月二十日

岩次郎殿 大學頭

林 述 齋 書 翰 (藏所翁樓得川中)

文選六臣註いかにも古色可愛之品に御座候、併高價迎も相談もこのひ申間敷、致返却候。全體御場所には六臣は無之哉と存候、左候得ば○本にて有度ものに御座候得とも、此價にてはいか様減じ候ても、餘程の儀と可相成候間、先々書林へ被返戻可然存候。別紙も同様致○回候、草々頓首。

名は銜、字は徳詮、述齋はその號、徳川幕府の儒官なり。叙爵せられて大學頭と稱す。父を能登守乗蓮といふ、後林祭酒簡順の後を嗣ぎて林氏を冒す。當時昌平坂一區は林氏の別邸たりしが、之れを幕府に獻じて區域を開拓し、旨を受けて覺前寮を起せり。天保戊戌年、歳七十四にして歿す。

り 終 っ け へ 5 返 交 へ

やどのみあらんは口惜しと思ふべし。かゝる時の文の上にては難事とて捨つべきものなく、一もとの草、一頭の犬、猫も翁もことごとく見る人の慰めになりて暫し旅寐の憂さをわするべく、げによき友よと其人いと懐かしうも成りぬべし、長さ尋に餘ることもほわづらはしからぬこと、短かくてもよかるべきは近火負傷の見舞、すべて不慮のことに人の心あはたしからん折、いと長々と書きつとげたる見るもうるさく、なかくの心地ですべき。「唯いさゝか」抄録

○芹うりの十銭生涯

何處持參の芳翰落手、御無事の旨珍重存候。類火難に御のがれ候よし、是又仕合難申盡候。残生いまだ漂泊やます、湖水のほとりに夏をいとひ候。猶こち風に身をまかすべくやと秋立頃を待かけ候。且兩御句珍重、中にもせり賣の十銭生涯かるき程我世間に似たれば、感慨少からず候。口質他に越る、いよいよ風情可被懸御心。愚句、

京にても京なづかしやほととぎす
暑氣に痛候て及早筆候。

小春 丈

小春は加州金澤の俳人。因に記す、せり賣の句、「十銭を得て芹うりの歸りけり」

ばせを

りあかたし

手紙雜誌 第五卷 第五號

(二〇)

○古色可愛の品(高價ゆるぎ買入見合)

文選大臣註いかにも古色可愛之品に御座候、併高價迎も相談もとのひ中間敷、致返却候。全體御場所には大臣は無之哉と存候、左候得ば○本にて有度ものに御座候得とも、此價にてはいか様減じ候ても、餘程の儀と可相成候間、先々書林へ被返戻可然存候。別紙も同様致○回候、草々頓首。

十月二十日
岩次郎殿
大學頭

名は銜、字は徳詮、述齋はその號、徳川幕府の儒官なり。叙爵せられて大學頭と稱す。父を能登守乘繼といふ、後林祭酒簡順の後を嗣ぎて林氏を冒す。當時昌平坂一區は林氏の別邸たりしが、之れを幕府に獻じて區域を開拓し、旨を受けて僉館寮を起せり。天保戊戌年、歳七十四にして歿す。

林 述 齋 書 翰 (中川得樓翁所藏)

文選大臣註いかにも古色可愛之品に御座候、併高價迎も相談もとのひ中間敷、致返却候。全體御場所には大臣は無之哉と存候、左候得ば○本にて有度ものに御座候得とも、此價にてはいか様減じ候ても、餘程の儀と可相成候間、先々書林へ被返戻可然存候。別紙も同様致○回候、草々頓首。

十月二十日

石川雅望書翰(中川得樓翁所藏)

良阿上人様
久々御音問を絶し候、御許容可被下候。扱此
仁常陸江戸崎にて平七となりの候、甚風流
を好み申され候。前々より御高風を仰ぎ渴望
いたし被申候。仍而同道にて罷出べく存候處、
此節俗事他行仕りかね候に付、此人計さし
上候、御逢被下候様奉希候、近日中に罷
出御禮可申上候、以上。

○此人ばかり差上候(紹介状)

石川雅望

久々御音問を絶し候、御許容可被下候。扱此
仁常陸江戸崎にて平七となりの候、甚風流
を好み申され候。前々より御高風を仰ぎ渴望
いたし被申候。仍而同道にて罷出べく存候處、
此節俗事他行仕りかね候に付、此人計さし
上候、御逢被下候様奉希候、近日中に罷
出御禮可申上候、以上。

六樹園

雅望拜

四月七日

良阿上人様

石川雅望、字は千相、五老齋、逆旅主人、六樹園等の號あり、又狂名を宿屋の飯盛ともいひ、蜀山人に就いて學ぶ、江戸有名の狂歌師なり。文政十三年歿す、年七十八。著書には、「雅言集覽」源注餘瀟、其の他戯著小説歌種あり。

石川雅望

手紙雜誌 第壹卷 第五號

(一四)

○羅馬字にて出版可致哉

拜啓、陳は拙者演説外國人用の爲めに羅馬字にて出版可致哉と存候に就ては、御署名ある跋も加へ度、

千の婢を
外山

御許容の程相願候。英國に於るジャパン、ソサエチー杯へも數部送附可致考に御座候。謹で貴答を待つ、拜具。

九月十五日

山縣 悌三郎 殿

大隈のエライ事は、外國人にも知らしてやること、茶話會の節、伯に云つておいた。

正

一

前米國公使バック夫人は、公使其人と同様に、濃厚篤實の各名高き人なり。右は米國へ引上げた其の郷里ジョルジャ州アトランタ市より鳩山夫人に宛てたるもの、温存嬌々、情緒纏綿宛々として其人に接するが如し。

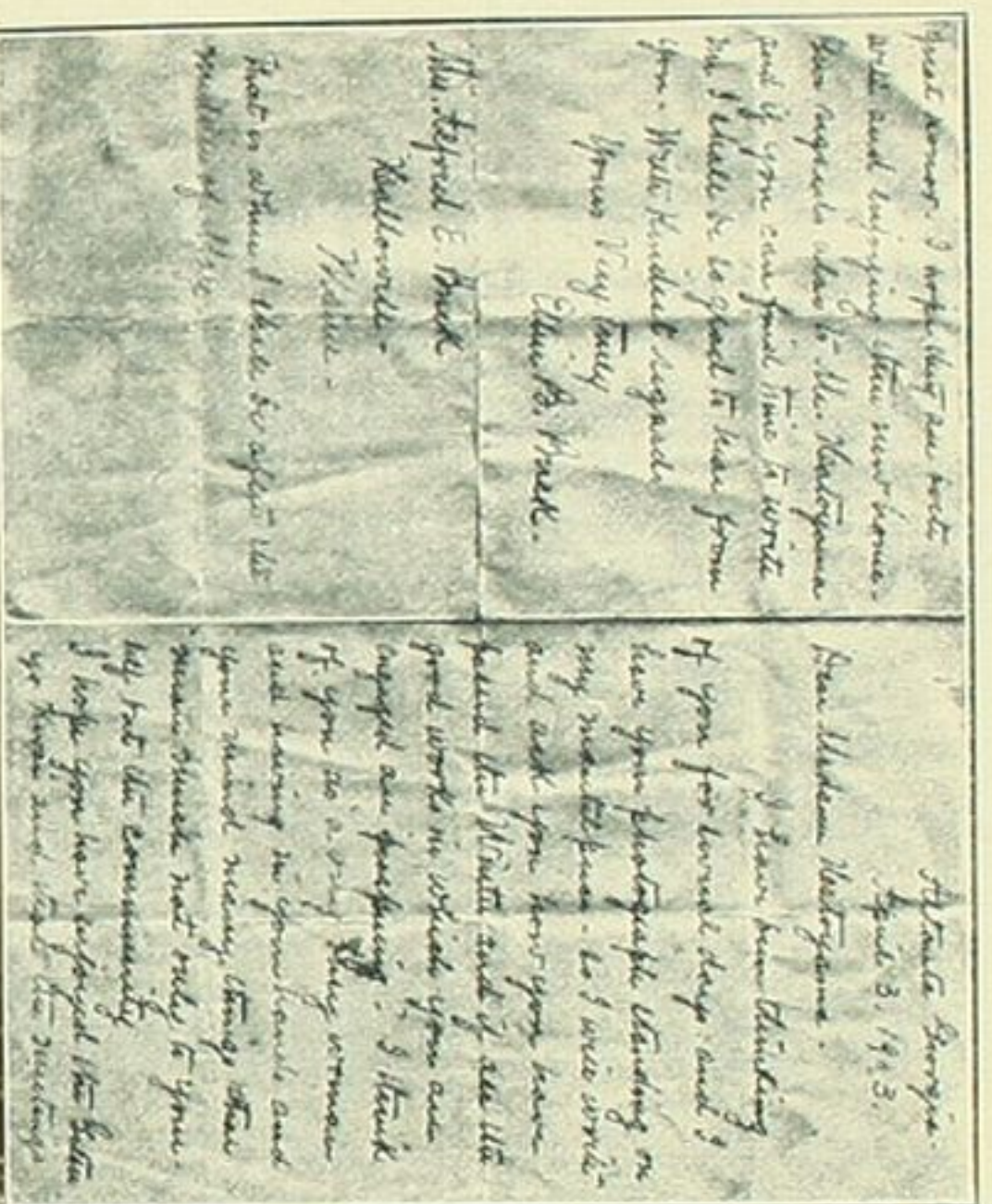
Atlanta Georgia.
April 3, 1903.

Dear Madam Hatoyama,

I have been thinking of you for several days, and I have your photograph standing on my mantelpiece—So I will write and ask you how you have passed the Winter and if all the good works in which you are engaged are prospering? I think of you as a very busy woman and having in your hands and mind many things that mean much not only to yourself but the community. I hope you have enjoyed the *Gettysburg Kiosk* and that the meetings have been interesting. I have often imagined myself present again, for my life in Tokyo was busy and being so very quiet here and so very lonely I think of all the activities that interested me there. Next year I shall try to take up some Club work here, and make myself busy so that I may be less lonely.

Yours very truly,
Edith B. Buck.

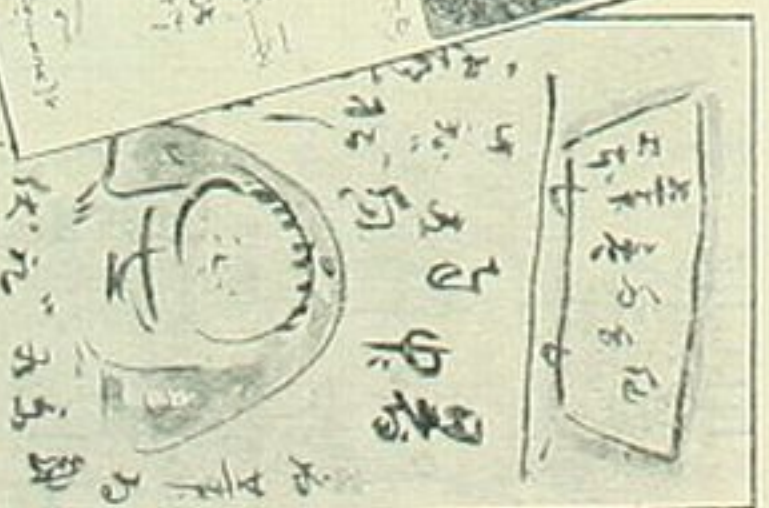
Mrs. Alfred E. Buck,
Hallowell,
Maine.
That is where I shall be after the middle of May.



手紙雜誌 第五卷 第五號

(三五)

蓋自露丹寶 (一)



暑中伺守田寶丹(明治三十九年四月四日) 露中、右御禮伏て奉申上候也。此は日本總なる高木露太郎氏へ贈りしもの、露の手紙にば多くは自筆の濃墨あり。

寶丹

(二) 麥酒の滴をひく(是阿) 此からが關連日本さき武家修行、玉後でぬつり敬取るべき、玉築城北堂野郎とよ。玉突もし喉かわかしたる汗推ひつと麥酒の滴をひいたりな 是 阿

(三) 巴里村も追々さびれ

(藤村某) 六九(二十五) 君の出発後替つた事なし、岡崎一君アメリカより來遊二年間位は滞在の由、巴里村も追々さびれる計り、第一二村長を頼命したる拙者、少々手持無沙汰なり。武田君も歸巴(兩三日中に歸國四年振りの東京は如何、思ひやられて羨まじ、諸君へ宜しく。

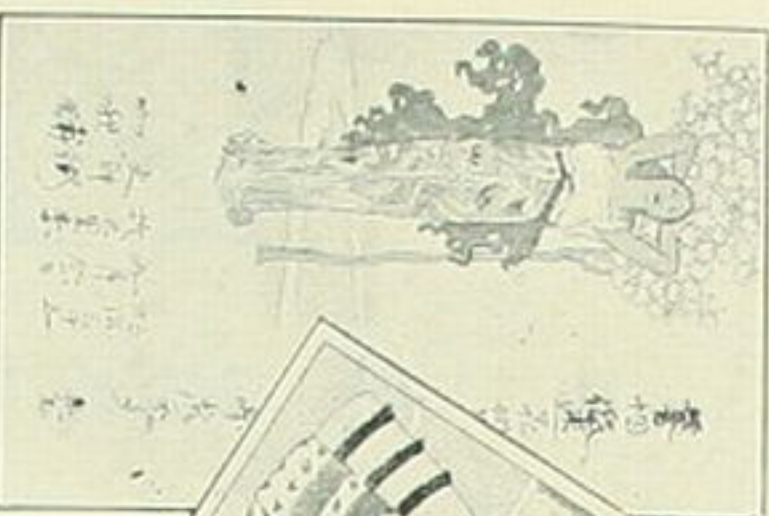
(四) 日本の花と西洋の花と

(おの吉) 九三(十七) 今日獨り散步に出かけて植物園に往つた、色々國を想ひ出す花が咲いて居つた、桔梗の花がめづらさうに唯一樣植まつて居つた、傾顔の花が垣根にからんで居つた、日本の花は凡て優美で風韻がある、趣味がある、反之西洋のは色はささい、香は高い、伴氣品が無い、毒々しい、私は蘭や石竹を此地に見ることが出来るがあの「一本咲けり」もある雅緻あるやさしい撫子の花を見出すことが出来ない、大和撫子を西洋人に見せたら、さうと培養するだらうと思ふに、日本人は馬草として馴みない、それが日本人の勉強の足りない所で弱點だらうとおもふ。 芙蓉堡 わの古吉

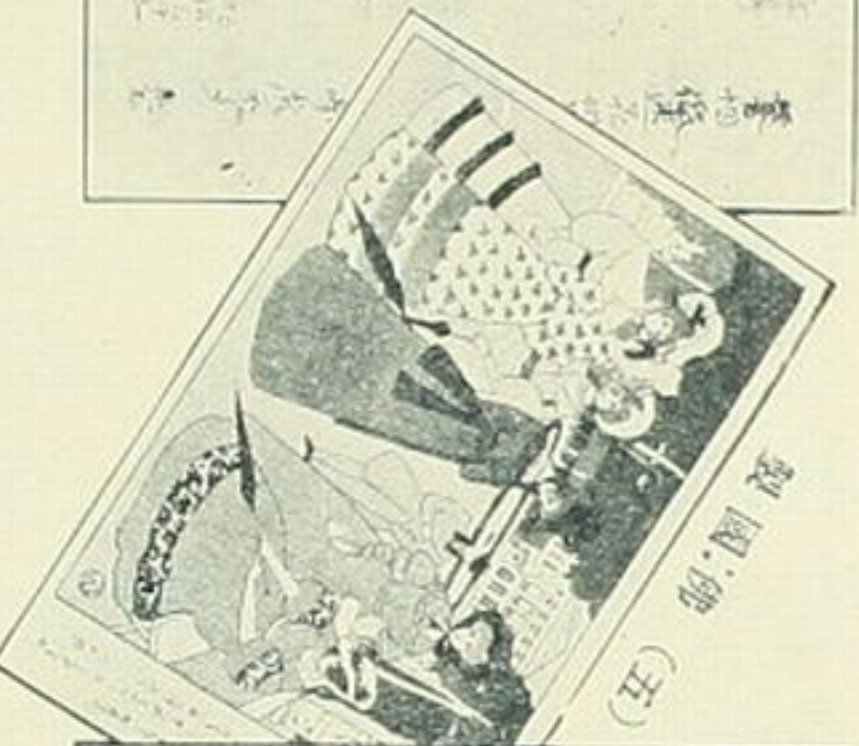
(五) 別れに臨んで(李助) 九三(十四) 別れに臨んでは何云ふこともなかりけり 今日滿谷氏の出立を送りて君をカンフエーを飲む

李助

(六) 暮煙低迷(久保田米齋) 九三(十三) 暮煙低迷花如夢、性膽仙娘步虛聲。 以上(二)(三)(五)(六)の繪葉書は何れも澤島家和田外面氏の許へ送られしものなり。



製國佛 (六)



製逸獨 (四)



製國佛 (二)



手紙雜誌 第五卷 第五號

(三七)

二の強きといふ文章を能く人^が婦人かめく
 けいこくせんしと物ふすのきく俗文を古
 けいぬ味をいふに^は俗樂の士文をの^り嫌
 りす^は直らざる真情と標し^て又^は字とま
 する^は平様を拙く^しと^もせし^も改練あ
 り^て豊公の平問の^はま^はい^はぬ^は其人の極^な
 文章をいふ^はこと^も其^の人^の意
 趣をいふ^は地^の能^きこと^もい^はぬ^はけ
 婦人^の文章^を列^す^は術^の名^をい^はす^は
 論^のい^はる^はこと^も其^の枝^の路^を母^に裁
 ち^て婦人の^は整^のの^はい^はぬ^はこと^もい^はぬ^は

四
 九
 三
 九
 四

識^をい^はす^は平^の札^のい^はぬ^はこと^もい^はぬ^は
 論^のい^はる^はこと^もい^はぬ^は滑^のの^はい^はぬ^は
 こと^もい^はぬ^は刻^のの^はい^はぬ^はこと^もい^はぬ^は
 こと^もい^はぬ^は其^の印^をと^り平^の札^中に^は抜^きこと^もい^はぬ^は
 こと^もい^はぬ^は其^の人^のあ^るの^はい^はぬ^は校^の書^中に^はい^はぬ^は
 こと^もい^はぬ^は其^の味^をい^はぬ^は紅^の草^のを^はい^はぬ^は
 こと^もい^はぬ^は其^の味^をい^はぬ^は別^のの^はい^はぬ^は謹^の厚^のの^はい^はぬ^は
 こと^もい^はぬ^は其^の味^をい^はぬ^は又^は婦^の人^の新^の婦^をい^はぬ^は
 情^をい^はぬ^は其^の味^をい^はぬ^は其^の人^のい^はぬ^は

亮之蟬（虫）之（虫）動のみある（虫）也
動を言ふこと同じ扱ふ祀歌を禁じ
得ざる也とあり

又又目も見る所は此の云に更なる記
山を即ち青くえりて影をさす也
或は支那文あり或は口を文ありと一
日扱ふをん、其飾のみある文あり
誰れもあつても神のこえり也
其飾の、支那文あり或は終り青く
んあつてもん或は床上下或は楯
又或は襖、而ん此の飾の文あり



之扱ふ支那語ありん可なり
のみ上流の扱ふ松と云 扱ふ扱物
なり 何れも其の飾せりなり
うきや、扱ふなり、此の扱物
と書いてあるなり、此の扱物の
物と云ふなり、日用の油なるなり
治のありたり、此の扱物と云
ふて七よ位にあり、例、扇、衣、巾、織
瓶、ひも、茶、鉢、茶、碗、茶、杓、茶、臼、
扇、手、巾、貴、人、の、帯、紙、入、箱、扱物

流名俗人の眼に於ては、
↑
Aと見えて、ハルこの観念の
大なる善なる徳を其の極に
氣のこころ善く過し、
又えさるるもを徳とせし
の命の地を極の下の善
のこころ十七又を徳とせし
をひく(四)まきまき
徳川弋昌平二百年の政
心持程の現象と云ふこと
出来ぬ

徳川弋昌平

女

此の俗人の上の文のこころ、
をさし、
七章の倫理的義徳のこころ
と論じ、
こころ、
と云ふ、
を揚げて

明治三十七年

八月十日

赴奉
長崎商人